



Title	中井履軒の「徳」解釈の構造：「四徳」への解釈を中心として
Author(s)	池田, 光子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2006, 40, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/5786">https://hdl.handle.net/11094/5786</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 中井履軒の「徳」解釈の構造

—「四徳」への解釈を中心として—

池田光子

はじめに

懐徳堂に学んだ中井履軒は、広範な学問分野に興味関心を抱いた知識人であった。懐徳堂は、開堂当初は学主である三宅石庵の学風を受け、陽明学・朱子学・古義学など、それぞれの長所を取り入れた折衷学の様相を見せていたが、履軒が師事した助教の五井蘭洲が朱子学を中心としていたため、履軒の学問も朱子学となるはずであった。だが、履軒は朱子学を中心とするものの、それに満足することはなかった。次男という比較的自由な立場にあって、履軒は朱子学に止まることなく、本草学や医学、天文学など各種学問まで理解するに努めた。その態度は中心となるべき経学においても同様であった。履軒の経学を明治期の学者西村天囚は以下のように説明する。

其の經を治むるや、宋儒の説に就きて宋元明諸家の見を參取し、群言を折中するに自家の独見を以し、苟も意

の合はざる所あれば、名賢鉢儒人の尊信する所の者と雖も、弁駁規切して廻避する所なく、一に孔孟の本旨を得んことを期せり。(『懷德堂考』下巻「履軒の経業」)

履軒の経学は天囚により「独見」と高く評価されており、それは履軒の所行を知る者にとって容易に想像がつくことである。しかし、何がどのように「独見」なのか、「独見」とは具体的に何を意味するのか、天囚はそこまで言及することはなかった。この欠を埋めたのが山中浩之「中井履軒の思想」(『中井竹山・中井履軒』、明徳出版社、一九八〇年)である。山中氏は『中庸逢原』と『大學雜議』とを資料として、履軒の考える「徳」をめぐって、その独自性を紹介した。すなわち、履軒が考える「徳」の特徴を「履軒において、徳とは、おのれの外にあって、新たに獲得されるべきものであった」と指摘している。<sup>(1)</sup>

山中氏の指摘は、管見の限り、同じく履軒の『論語逢原』『孟子逢原』の中でも繰り返し確認できることであるとともに、履軒が「徳」を人間の外側である「<sup>(2)</sup>」の上にあるものとしていたことが分かる。よって、その妥当性は十分に認められるべきであると思われるが、山中氏の指摘は次の疑問を誘引する。すなわち、徳が「おのれの外にあって、新たに獲得されるべきもの」とするならば、履軒にあってはそもそも「内」と「外」とはどのような関係にあるものとして理解されていたのか。山中氏の論を引き継ぎながら、『孟子』公孫丑にある「四端説」の箇所に着目し、この問題を考えてみたい。

なお、本稿で用いている「逢原」のテキストは、大阪大学附属図書館が所蔵している履軒自筆本を底本とするが、漢字・仮名については現行字体に改めて表記する。

## 一、「四徳」の構造

『孟子』公孫丑の四端説の確認から論を始めておこう。

惻隱の心は、「仁の端なり。羞惡の心は、義の端なり。辭讓の心は、礼の端なり。是非の心は、智の端なり。

「Aの心は、Bの端」という形のセンテンスが四つ並んだ、シンプルな文章である。通常「惻隱」・「羞惡」・「辭讓」・「是非」を四端と言い、「仁」・「義」・「礼」・「智」を四徳という。この一文に対する朱子の解釈は次のとおりである。

「惻隱」・「羞惡」・「辭讓」・「是非」は、情なり。「仁」・「義」・「礼」・「智」は、性なり。心は、性情を統ぶるなり。「端」とは、緒なり。其の情の発するに因りて、性の本然得て見るべし。猶お物の中に在りて緒の外に見われる有るがごときなり。(『孟子集註』公孫丑)

朱子は、公孫丑の一文に「情」と「性」との概念を取り入れ、四端を「情」に、四徳を「性」にあてはめて解釈する。「其の情の発するに因りて、性の本然得て見るべし」という言葉は、つまり、「四端が発現することにより、四徳の存在が明らかになる」という意味であり、つまりは朱子にとっての「四徳」とは「内」に存在することとなる。そしてそれは「猶お物の中に在りて緒の外に見われる有るがごときなり」という一文によつても確認される。

朱子にとって「徳」は人間内部に存在するのである。

この朱子説に対し、履軒は次のように反論する。

「仁」・「義」・「礼」・「智」元は是れ徳の名なり。「性」とは是れ徳の種子を具うるのみ。唯だ其れ然るのみ。  
 ……「端」とは、尙に之に成らんとすの端緒なり。蓋し言うこころは人の性善、自ら人に忍びざるの心有り。  
 発出して「惻隱」の心と為り、抜がりて之を充たす。(『孟子逢原』公孫丑)

朱子は四徳を「性」と結びつけて考えたが、履軒はこの考えに反発する。履軒によれば、「徳」は「徳」であり「性」ではない。両者は区別されなければならない。山中氏の指摘を参考にすれば、履軒にとって「徳」とは人間の外側である行いにあるものだから、「徳」を「性」と同一にしてしまうと、「徳」が内部にあることになるため矛盾をきたす。「徳」を人間の内側に在る「性」に繋げて解釈することはできないのである。そうではなく、履軒は「性」を「徳の種子」に換言し、「徳」へと成長する可能性を秘めた存在と捉えるのである。

「性」を「徳の種子」と位置づけるとすれば、「情」はどうなるのであろうか。前掲の注釈に続けて、履軒は比喩を用いながら、三者の関係を次のように説明する。

「仁」・「義」とは、譬うるに猶お鶏のこときなり。性の善、猶お卵の胎に在るがこときなり。卵の已に地に墜つるは、猶お「惻隱」・「羞惡」のごときなり。……既に月を累ね、羽長じて冠成り、翼を鼓うちて鳴く。是に於いて始めて鶏の名有り。是れ本語為り。……情とは性の発なり。本は別項に非ず。註の「心、統性情」の句、未だ円ならず。(同上)

## 中井履軒の「徳」解釈の構造

比喩に従えば、胎内に在る「卵」が「性」である。「性」は胎内にあるため、その姿は全くみえない。生まれ出た「卵」が「情」である。生まれたとはいへ、「卵」は「鶏」ではない。よって「惻隱」・「羞惡」は「徳」とは区別されなければならない。そして成体となつた「鶏」が「徳」である。人は誰でも本来的に善である。この善なる「性」が「情」として「惻隱」や「羞惡」の心を生みだし、それが発展すると「仁」・「義」などの「徳」へとたどり着く。「鶏」がそこにいるかのように、「仁」・「義」は確固としてそこに存在する。履軒は「性」・「情」・「徳」を一連の流れの中で捉え、各々を明確に区別していた。

だが、この比喩を再考するに、「性」にのみ具体性がない。「情」には「惻隱」・「羞惡」が、「徳」には「仁」・「義」がそれぞれ挙げられているような対応が、「性」についてはされていない。そこでもう一度、「徳の種子」と述べられた「性」とは何か、考察しておこう。

## 二、「性」中の四徳

履軒が「性」について詳細に注釈を施しているのが、『論語』学而の「有子曰く、其の人と為りや孝弟にして上を犯すことを好む者鮮なし。……君子本を務む。本立ちて道生ず。孝弟なる者は、其れ仁の本為るか」の一文に対してである。まずは、朱子の説から確認しておく。

蓋し「仁」とは是れ性なり、「孝弟」とは是れ用なり。性中只だ箇れ「仁」・「義」・「礼」・「智」の四者有るもの。(『論語集註』学而)

朱子は「性」の中には「仁」・「義」・「礼」・「智」の四徳があり、これら四徳が動いた時、その効用が「孝弟」であるとする。「性」と「徳」との関係に注目すれば、「徳」は「性」の内部に位置づけられるとするのが朱子の説である。一方履軒は「夫れ有子は未だ嘗て性を論ぜず」と述べて、この経文の解釈に「性」を援用すること自体を批判する。履軒にとって「徳」は外部にあり、内側にある「性」とは同一視されてはならない。履軒は「徳」と「性」との差異の説明を兼ねて注釈を記す。

性は善なり。<sup>(1)</sup>「仁」は是れ徳の名なり。其の道は則ち善中の大綱なり。「孝弟」も亦た善中の一事なり。性を論じて「仁」を擧ぐれば、則ち孝弟は「仁」の中に圍られ、別に頭を出さざるなり。「仁」は既に性の中に存すれば、「孝弟」豈に独り逃れ出るを得んや。「其の人と為りや孝弟」、有子豈に性を論ぜしや。凡そ性を以て解を作す者、皆非なり。<sup>(2)</sup>「孝弟」は行いなり、「仁」も亦た行いなり。<sup>(3)</sup>行いに遠近有り。故に本末の説有り。

若し性を論ぜば、「孝弟」と「仁」とは、綱目の差有るのみ。本末の指すべく無し。「仁」・「義」・「礼」・「智」は、人の性の綱にして、綱は是れ統目の称なり。「孝弟」豈に「仁」・「義」の目に非ざらんや。〔論語逢原〕学而

傍線部①で、履軒は「仁」を「徳」の名称であると言う。その「徳」が人間の行いの上に表出するものだとする考えは、傍線部②に表れており、「仁」と「孝弟」とを同じ「行い」として解釈していることも確認できる。これは、「行い」としての両者の間に差異はない、と履軒が考えていたことを示唆している。

このように、「行い」として「徳」を理解している履軒は、朱子が「仁」を「性」、「孝弟」を「用」とした上で「本末」を解釈しているのに対し、傍線部③のように、「行い」の「遠近」から「本末」は生じるとして反駁する。

つまり履軒は、「仁」を人間の内側の存在である「性」に直ちに関連づけることで「孝弟」とは質の異なるものとし、「行い」という面で同等であるはずの両者に差を設けるような朱子の解釈を批判するのである。

しかし、引用箇所の末となる波線部では、「若し性を論ぜば」として、「性」中での話をするのであれば、「仁」と「孝弟」との問には「本末」ではなく「綱」「目」の差異がある、と履軒は言ふ。

「性」の話に履軒が「仁」や「孝弟」などの「徳」名を用いていることは、前章で確認した『孟子逢原』での「性」の注釈と併せて考えると、「徳の種子」として「綱」「目」に「徳」の名称を用いていると言えよう。この点を踏まえ、傍線部①や②の言葉を考えるに、「徳」の名称とは、行いの上に存在する「徳」に対してのみ使われるとは限らないことを注記した言葉であるとも考えられる。

さて、朱子は「性」の中に「仁」・「義」・「礼」・「智」の四者のみを想定するが、履軒は「性」の中に「綱」と「目」とを設け、朱子とは異なる「性」の構造を築く。履軒の考える「綱」とは、「目」を統率する存在であり、「綱」である「仁」は、「目」である「孝弟」を包括する存在とする。「徳」としては「遠近」があるのみとされた二者が、「性」の中では包含関係にあるとされるのである。

以上のような「徳」の名称の用いられ方にについて、次のように履軒はまとめる。前掲の注釈に続く箇所であり、前章に挙げた、『孟子』公孫丑の一文が引用されている。

孟子言えらへ、「惻隱の心、仁の端なり」と。此れ本語為り。其の端を拡充すれば、以て「仁」徳と成すべきを謂うなり。又言ふ、「惻隱の心、仁なり」と。是れ推窮の言にして、意に緩急有るなり。……「心」字の竟に

釈然とせざるは、此れ是れ宋学なればなり。孟子の本語に据らずして、推窮の言を用いればなり。蓋し心は惟れ宜しく性を論すべく、未だ徳を称えるべからず。徳とは只だ人の行いの上に在れども、其の理は心に根たり。自ら内外本末の弁有り。(『論語逢原』学而)

始めに提示された孟子の言葉が、前章に挙げた『孟子』公孫丑からの引用である。末尾では、「心」については「性」にて論じることができるが、未だ「徳」を用いて述べてはならない段階であることを言い、「徳」が人間の外側となる行いに表出するものであることを主張する。これを主張した上で、「自ずから内外本末の弁有り」と述べる。これは、「徳」の名称は、「心」という人間の内側に存在すれば「性」、外側である行いとしてのものではれば「徳」として用いられていることを表していると言えよう。

履軒の考える「徳の種子」とは、「性」の中に存在するものであることは前章にて確認できた。履軒は、「性」の中に、「徳」の名称を持つ「徳の種子」というものを設定することによって、「徳」が決して人間の内面とは無関係であるとはせず、人間の内と外とを繋ぐ道を構築したのである。

### 三、履軒と竹山

以上「徳」論をめぐって履軒の独自性を探ってきたが、履軒のそれは、朱子とは大きく異なっていることが確認された。だがこれは朱子を比較対象としてのことであって、「独見」か否かを判断するためには、それだけでは不十分ともいえる。そこで、次に兄である竹山と比較してみよう。

竹山の解釈を探るにあたっては、この問題について明快な記述の見える『竹山先生国字牘』を用いる。<sup>(3)</sup>「答服部善藏」<sup>(4)</sup>と題された箇所に、『孟子』の一節を問い合わせられた時の返答が記載されており、そこに「心」「性」「情」に対する竹山の解釈が、喻えを用いて述べられている。

「仁・義・礼・知、根乎心」ハ坊刻ノ本ニ、昔ヨリ「根サス」ト副墨スルヨリ、人多ク誤リ会ス。……故ニ弊校ニテハ、已前ヨリ「根タリ」ト読シムル也。……心ハ性情意志ノ説名ニテ、本末ヲカ子、動靜貫クモノナリ。譬へハ心ハ一本ノ木ノ如シ。「仁義ハソノ根トナリ、惻隱羞惡ハ、ソノ萌芽トナリ、万善百行ハ、ソノ枝葉花実トナル也。』(『竹山先生国字牘』卷一「答服部善藏」)

「仁・義・礼・知、根乎心」とは、『孟子』尽心にある経文である<sup>(5)</sup>。竹山は、「根」の訓読みについて説くと共に、「心」と四徳とがどのような関係になつてゐるのか、「木」を比喩として説明を施す。それが末尾の二文である。それによると、竹山は「木」そのものを「心」とし、その「根」を「仁」「義」などの四徳にあてはめる。そして芽生える木の芽を「惻隱」「羞惡」などの「情」である四端とし、枝や花を「万善百行」とする。つまり、竹山は「心」の中に、履軒にとっては「徳」であった四徳を含めて考えている。もし、竹山の言う「根」の箇所が、履軒の言う「徳の種子」たる四徳であるならば、一見、両者の解釈は一致しそうである。だが、竹山は「万善百行」を「徳」とはしていない。逆に、「心」である「木」の一部として、四徳や四端を捉えていたり解釈は、一章に挙げた、「心は、性情を包括する」という朱子の考え方と類似していると受け取れる。

さて、該当箇所の經文に対する朱子の解釈であるが、朱子はこの箇所では竹山のように木を喻えとして解釈を行

「仁」とは是れ根、惻隱とは是れ萌芽。親親・仁民・愛物、便ちは是れ推広し枝葉に到る。『朱子語類』性理三「仁義礼智等名義」

「仁」を「根」、「惻隱」を「萌芽」、「親親」などの人間の行いを「枝葉」に準えている表現は、竹山と共通するものである。つまりこれは、竹山の解釈が、朱子の考え方を受けてのものであることを示しているといえよう。

では、履軒がこの経文に対し、どのような解釈を付しているのかを確認する。経文に四徳が述べられているため、一章に挙げた、『孟子』公孫丑「惻隱の心は、仁の端なり」の箇所を踏まえて履軒は注釈を施す。次に挙げる『孟子逢原』の傍線部①が、『孟子』公孫丑を指した言葉となる。

此の章、「仁」・「義」・「礼」・「智」、其の本位に還りての言焉り。正に四端の章と同じ。「仁」・「義」・「礼」・<sup>②</sup>

「智」とは、徳の名なり。四徳の源、心の性の中に在り。而して四徳は心胸の中自り湧き出づ。故に「心に根たり」と曰うなり。「根」と「本」とは同じからず。「本」とは土の外に在り。「根」とは土の中に在り。其の生氣の漸次發出するを取りて譬えと為すなり。故に唯だ「根」能く当たると為すなり。「本」の若きは之を當つる能わず。「本」を以て「根」と解すべからず。<sup>③</sup>四徳の根、心の中に在り。而して榮華外に發出する者は、「晬然盜背」、是れなり。則ち四徳正に其の樹身枝葉に当たるのみ。……性の四徳、是の章に在りて當を得ず。四徳、其の本位に還るが故なり。(『孟子逢原』尽心)

## 中井履軒の「徳」解釈の構造

傍線部②で、履軒は、前章までで確認できたのと同様に、「心」の「性」の中にあるのは「徳」ではなく「徳」の源であるとし、四徳は「性」から発出したものであるという考え方を主張する。これと傍線部③の「四徳の根、心の中に在り」とを併せ考えると、木が根を張る「土」を「心」として解釈していたと言える。

竹山は、「心」を「木」とし、履軒は「心」を「土」とした。また、四徳の源は「心」の「性」の中にあるが、四徳自体は「樹身枝葉」、つまり人間の外に存在する「徳」と主張した履軒に対し、竹山は四徳について特に何の注記もせず、人間の「心」の「根」、つまり人間の内に存在するものとして解釈していた。このことは、竹山が懐徳堂で活躍していた時期の懐徳堂学派の解釈と、履軒の解釈とは異なっていることを示している。

三者の解釈の共通点は、「徳」の名称を持つものから始まり、育成する過程に「情」や人間の行動などが対応している点にある。育成過程という一線上に並んだ関係として捉えていることに変わりはないが、異なるのは、朱子と竹山とが育成段階の一部分にのみ「徳」を当てはめて考えているのに対し、履軒は「徳」の元となるものが成長し、最終的な到達点として「徳」を設定している点である。

これは履軒が、成長という動的な面を備えたものとして「徳」を理解していることから生じた差異と言えよう。この理解は、一章に挙げた「鶏」の比喩からも確認できる。また、履軒は人間が「種子」を持ってはいるが、「徳」とは人間の外側に表れるまで「徳」ではないとすることは、履軒が人間の行動を重視していくこととの表れであると共に、より現実的に経文の「徳」を解釈しようとしていた姿勢が窺えるものである。

### おわりに

以上、履軒の考える「徳」解釈の特徴について、四徳のまとまりに着目し、人間の内側における「徳の種子」の存在と、それが発育することで人間の外側である「行い」へと至る構造とを明らかにした。

その思想的特徴を朱子、及び竹山と比較してみると、竹山の解釈は朱子の解釈を強く意識したものであり、履軒は兩者とは異なるものであった。しかし、「徳」・「情」・「行動」を一つの流れの中にあるものとして捉える点は共通していた。おそらく履軒は、朱子のこのような解釈を批判的ながらも受容した上で、人間の行いを重視する姿勢から、「徳」に「成長」するという性質を付加し、「徳の種子」から「徳」(行動)へ至るという解釈に至ったと考えられる。

竹山との差異は、竹山が懐徳堂の学主であったという立場上、四徳を「性」とはしないという、朱子の解釈に真っ向から対立するような考えを表明することが困難であったために生じたとも考えられるが、少なくとも兩者が活躍していた時期は、履軒の解釈とは懐徳堂学派のそれから離れたものであったと言えよう。

ただ、懐徳堂では、初代学主の時から、行いを重視する姿勢は見られた。例えば、初代学主である三宅石庵が行った講義を記録した『万年先生論孟首章講義<sup>(7)</sup>』の中には、「スグニフミコンデ今日只今ヨリ、シテユクガヨキナリ、此ヨウニシテ間断ガナイト、凡人ガ聖人ニナル也」と、君子を目指して、行うべきことを日々間断なく、また直ぐにでも実行すべきであることを述べ、行動を起こすことの必要性を講義している。また、同書の中では、仁義を実践する者には自然と利がついてまわる、という正しい行いを実践することで生じる「利」を容認した、特徴的な解

釈をしている。この講義は、大坂という商業地において行われたため、それを配慮してのものかもしれないが、人間の行動というものを重視し、またその行動が人の道から外れていかない限り、良い結果を生み出すものとして重視しているのが分かる。

人間の行動を重視する懷德堂学派の姿勢、これを履軒は継承し、懷德堂から離れることで、朱子学という枠に囚われずに、人間の行動を「徳」にまで昇華させる解釈へと発展したのではないかと考えられる。また、このことは、朱子学を通じて儒教を受容するに際し、実践的道德規範として取り入れ、日本という国に還元させようとした一端が表れているとも考えられる。

江戸期儒学の中における履軒の位置づけは、懷德堂学派が履軒に与えた思想的影響について更に明らかにする必要がある。この点については、「論語聞書」や「四書断」と履軒の解釈とを比較対照する必要があるが、これらについては今後の課題としたい。

### 註

- (1) 山中氏は、この指摘をするにあたり、「大學雜議」第一章「徳者得也。修之自有工夫。工夫既成、而有得於」。然後称之為徳也（徳は得なり。之を修むるに自ら工夫有り。工夫既に成りて、己に得る有り。然る後之を称して徳と為すなり）」を挙げている。
- (2) 例えば、「蓋心惟宜論性、未可稱徳。徳只在人行上而其理根乎心（蓋し心とは惟だ宜しく性を論ずるべく、未だ徳と称するべからず。徳とは只だ人の行いの上に在りて其の理は心に根たるもの）」（「論語逢原」学而）、「堯之盛徳、皆存平行中（堯の盛徳、皆な行中に在り）」（「孟子逢原」告子）などの解釈が見られる。
- (3) 大阪大学附属図書館所蔵の手稿本を用いる。内容は、中井竹山が知人や門人から問われた学問・政治・経済など

種々の問題について答えた手紙を集めたもの。本文は漢字片仮名交じり文である。

(4) 服部栗齋のことと思われる。元文元年(一七三六)～寛政二年(一八〇〇)。名、保命。字、佑甫。通称、善感。号、栗齋。摂津西成郡浜村の人。五井蘭洲に学び、竹山・履軒と交わった。

(5) 該当箇所の經文は次のとおり。孟子曰「廣土衆民、君子欲之、所樂不存焉。……君子所性、仁・義・礼・智根於心。其生色也、晬然見於面、益於背、施於四体。四体不言而喻」(孟子曰く「廣土と衆民とは、君子之を欲するも、樂しむ所は焉に存せず。……君子の性とする所は、仁・義・礼・智にして心に根たり。其の色に生ずるや、晬然として面に見われ、背に益れ、四体に施す。四体言わざして喻る」と)。

(6) 「孟子集註」の該当箇所は次のとおり。「仁・義・礼・智」は、性の四徳也。「根」は本也。「生」は發見也。「晬然」は清和潤沢の貌。「益」は豊厚盈溢之意。「施於四体」は謂見於動作威儀之間也。「喻」は曉也。「四体不言而喻」は、言四体不待吾言、而自能曉吾意也。蓋氣稟清明、無物欲之累、則性之四徳根本於心。其積之盛、則發而著見於外者、不待言而無不順也。(「仁・義・礼・智」)は、性の四徳なり。「根」とは、本なり。「生」とは、發見なり。「晬然」とは、清和潤沢の貌なり。「益」とは、豊厚盈溢の意なり。「四体に施す」とは、謂うこころは動作威儀の間に見る。「喻」とは、曉なり。「四体言わざして喻る」とは、言うこころは四体吾が言を待たずして、自ずから能く吾が意を曉るなり。蓋し氣稟清明にして、物欲の累無ければ、則ち性の四徳心を根本とす。其の積むことの盛んなければ、則ち發して外に著見するは、言を待たずして頗わざる無きなり。」

(7) 「万年」とは、三宅石庵の号。懷德堂が官許を得た享保一年(一七二六)に、それを祝う講演会で石庵が行った講義の筆記録である。筆者は未詳。大阪大学附属図書館に原本が収められている。また、翻刻・現代語訳したもののとして、湯浅邦弘、竹田健二、杉山一也、藤居岳人、井上了「懷德堂文庫所蔵『論孟首章講義』について——デジタルコンテンツとしての位置づけ——」(『中国研究集刊』第二十七号、大阪大学中國学会、二〇〇〇年)がある。

## 摘要

## 中井履軒的「德」解釋の構造——以「四德」の解釋為中心——

池田光子

中井履軒，是江戸時期活躍在大坂的，建立了懷德堂的黃金時期的人物。履軒的經學，被評價為具有「獨特的見解」。其独特性之一，即為在先行研究中已被指出的履軒的「德」的解釋。履軒認為，「德」是從人的行為中表現出來的。把「德」設定在人的「外」的履軒，是怎麼理解人的「内」和「外」的關係的呢？本論文從履軒對『孟子』的「四德」的解釋方面來對這個問題進行考察。

在考察時，為了明確履軒的解釋的特徵，先舉出了被履軒當作批判對象的朱子的解釋。同時，為了確認履軒是否接受了懷德堂的學問的影響，把其兄竹山（懷德堂第四代學主）的註釋也一起進行了比較。

可以說履軒的「德」解釋，是在重視了人的行動的基礎上產生的。「德」的種子從人的「内」向「外」成長的構造，與朱子和竹山不同。然而，在初期懷德堂學派中，可以見到重視人的行動的解釋。就是說，可以認為履軒是受其影響，做出了對「德」的解釋。由此，可以說，履軒的學問，即使是與竹山解釋不同，還是在懷德堂學派的影響下產生的學問。同時，可以稅履軒的「德」解釋，表現了他打算把儒教作為實踐道德來接受想法的一端表現。

キーワード：懷德堂，中井履軒，『孟子』，四德，四端